

松山道後を中心とする名所交通図繪

文・藤本一美

text by Kazumi FUJIMOTO

夏目漱石の小説『坊っちゃん』の舞台・松山は、四国随一の都市で、松山城郭を中心とする松平十五万石の旧城下町であり、往時の面影を残している。また、東域には古くからの道後温泉が湯治場情緒を醸し出す。

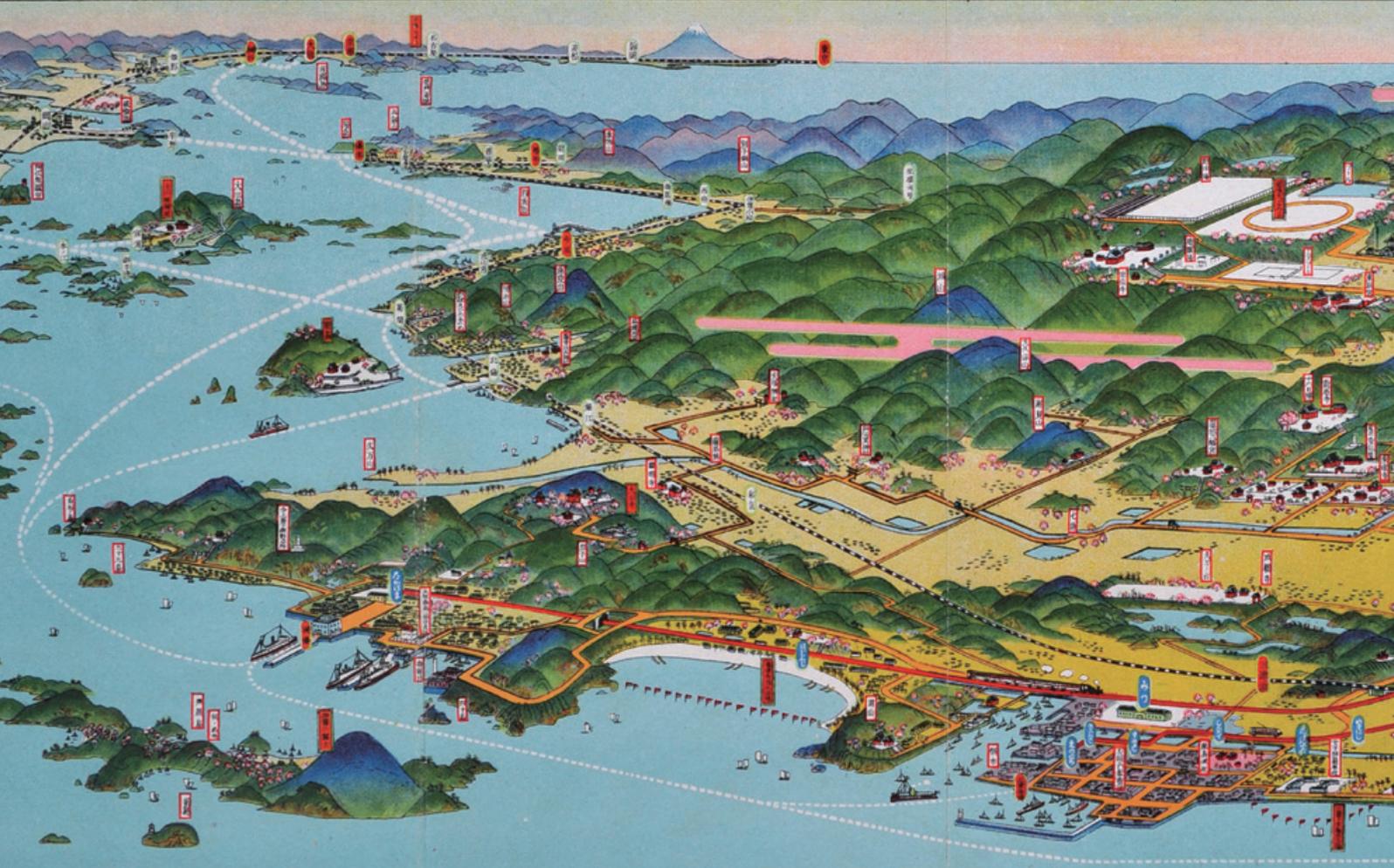
そんな市内を縦横に結ぶ路面電車の軌道線と郊外線と呼ばれる鉄道線を持つのが伊予鉄道である。

鉄道史は明治二十一年十月二十八日、松山（外側を経て現・松山市）―三津間開業に始まる。同二十五年には、三津―高浜間を延伸開業し、高浜線が全通。同二十九年には森松線の立花（現・いよ立花）―森松間が開業・全通（昭和四十年廃止）、同三十二年には平井―横河原間の横河原線が全通した。また、同三十三年には道後鉄道・南予鉄道を合併し、それぞれの路線を道後線、郡中線としている。

大正五年には、伊予水力電気と合併し、伊予鉄道電気に社名変更。同十年には松山電気軌道を合併し、路

藤本一美

首都大学東京・専修大学非常勤講師。日本地図学会会員。鳥瞰図・展望図資料室兼山岳情報資料室主宰。近・現代の鳥瞰図絵師の作品収集と研究に精力的に取り組んでいる。著書に『旅と風景と地図の科学Ⅱ』（私家版2006年）、最新刊に『展望の山50選 関東編』（東京新聞出版局）がある。



『松山道後名所図絵
【松山道後を中心とする名所交通図絵】』
(昭和2(1927)年春)
伊予鉄道電気株式会社 発行
大山日本ライン蘇江の観光社 印刷



伊予鉄道株式会社

Iyo Railway Co., Ltd.

創業：明治20年9月14日

設立：昭和17年4月1日

本社：松山市湊町4-4-1



明治以来の歴史を誇る路面電車と地域の生活を支える鉄道3路線

松山の外港である三津と松山を結ぶ鉄道の建設を決意したのは、創業者の小林信近である。小資本でも建設できる鉄道として軌間762mmの軽便鉄道を採用、四国で初めての鉄道として松山-三津間を明治21年に開業。日本で2番目に古い民鉄で、平成24年に創立125周年を迎えた。

市民の生活路線である郊外線と呼ばれる鉄道線は、高浜線、横河原線、郡中線の3線。路面電車は、主に松山城を囲む環状線と道後温泉に向かう路線から成っている。軽便鉄道時代に使用された蒸気機関車をディーゼル機関車として復元した「坊っちゃん列車」を運行、松山城、道後温泉と並び、松山観光三本柱の一つとして人気を集めている。



線の改軌・電化を進めた。

やがて昭和十七年、配電統制令により電力事業を分離し、伊予鉄道電気は解散。鉄軌道事業の譲渡を受けて、伊予鉄道として再発足した。

初三郎図は、昭和二年春完成の作品であり、スポンサーの伊予鉄道電気社長・井上要氏や専務の露口悦次郎氏ほかの協力と、伊予紳士・田内栄三郎氏の懇囑に、いつものことだが、感謝のことは（絵に添へて一筆）を述べている。

大胆な構図を見てみると、松山城を囲む市街地を中央に配置し、市内から郊外に縦横に延伸する赤い伊予鉄道の軌道線と鉄道線が目立つ。電車のんびり走行していて楽しそう。その左上には道後温泉本館（明治二十七年建築）や道後公園、湯神社、湯宿などを立体的絵図として表現。左端には瀬戸内海の果てに日本ラインから富士山、東京へと続く。右端には佐田岬から豊後水道の果てに鹿児島・開聞岳、さらには台湾、南洋諸島まで表示する心意気には感心してしまふほどだ。

嬉しいのは、秋の紅（黄）葉の色合いは少なめだが、春の満開の桜はピンク色で花盛りを明るく演出しているところだ。初三郎充実期の作品の一つとしてよいだろう。